

取組実績の概要（2 ページ以内）**【取組状況・成果】**

神戸大学は、グローバルな視点から諸問題の解決と同時に、さらに進んで課題発見に向けて主体的に行動する「課題発見・解決型グローバル人材」の育成を目指して、平成 28 年度から全学的な教育改革を実施している。クォーター制の導入他、本学の全学部生が卒業時まで身に付けるべき 3 つの共通の能力、すなわち「複眼的に思考する能力」、「多様性と地球的課題を理解する能力」、「協働して実践する能力」を「神戸スタンダード」として定め、これらの能力を涵養するため、従来の教養教育を見直し、低年次を対象とする「基礎教養科目」「総合教養科目」、そして高年次を対象とする「高度教養科目」へと再編した。本事業「神戸グローバルチャレンジプログラム」は、本学の教養教育のカリキュラムに体系的に組み込まれ、教育改革を加速するプログラムである。

本プログラムは、全学部の 1・2 年生を対象とし、1 つのクォーターや長期休暇を「チャレンジターム」として設定し、その期間に国際的なフィールドで学生が行う自主的な学修活動の成果を、「総合教養科目」の「グローバルチャレンジ実習」として単位認定する。学外学修活動の場を国際的なフィールドに設定している点に、本プログラムの特色がある。その目的は、プログラム参加学生が低年次において、「神戸スタンダード」の必要性を体感し、「学びとは何か」を主体的に考え、「学びの動機づけ」を得ることにある。国際的なフィールドで学修活動を行うことから、学生は異文化環境の下での自らの体験に基づき、「課題発見・解決能力」の必要性に気づくことができる。これらの気づきにより、学生は主体的な学修姿勢を大学入学後の早い段階から身に付け、その後の高年次において、海外留学等の国際的な学修活動へのさらなるチャレンジや、より専門的なテーマへの学修意欲の向上に繋げることが期待される。

本プログラムでは、学外学修活動の内容に沿って、①フィールドワーク型、②サマースクール型、③インターンシップ型、④ボランティア型、⑤学生企画型という 5 つのタイプのコースを開講している。派遣初年度となる平成 28 年度では 13 コースであったが、令和元年度には 16 コースにまで増え、それに伴い、学外学修先もアジア、ヨーロッパ、北中米、アフリカ、オセアニアと様々な国と地域へと広がっている。

5 つのタイプのコースのうち、「学生企画型」は、まさに学生の主体性が十分に養われ、発揮されるコースである。学生が自らの関心に基づき、本プログラムのコーディネーターやコース担当教員のサポートの下、自分自身で学外学修活動を計画していく。「学生企画型」コースの学生が取り組んだ活動内容は、参加学生の数だけ多種多様であり、特に、渡航国の社会的な課題に係る団体での活動を希望する学生が多い。

本プログラムの学外学修活動を実施するにあたり、各コースとも現地諸機関との緊密な連携体制を構築している。なかでも本プログラムの運営形態を大きく特徴づけているのが、本学の海外同窓会ネットワークの活用である。本学を卒業（修了）した元留学生及び現地駐在する卒業生から構成される海外同窓会が、欧州及びアジア地域 15 ヶ国・地域にあり、それを拠点とするネットワークが形成されている。本プログラムのうち、ヨーロッパ及びアジアで行われるインターンシップ型、フィールドワーク型コースが、海外同窓会ネットワークの協力・支援を受けて展開されている。

本プログラム参加学生は、本プログラム独自に設定した 3 つの力、すなわち「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」を修得することが求められている。事前学修及び事後学修時に提出するチャレンジシート及びリフレクションシートの記載内容を基に、ルーブリック指標により、これら 3 つの力の向上を自己評価し、またプログラム参加年度以降も、卒業まで経年変化を調査している。3 つの力について、その内容を理解し、獲得に向けて取り組んでいる「水準 2」以上と回答した学生の割合が、令和元年度では 84.4%、さらに、そうした力を実践・成果へと繋げている「水準 3」に達した学生の割合は、44.1%となっており、いずれも目標値を大きく上回った。その後の経年変化においても、目標を超える値が得られており、プログラム参加経験が 3 つの力の向上に繋がったと言える。

プログラム参加後アンケートの「本プログラムの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいと思いますか」という問いに対して、8 割以上の学生が「そう思う」と回答している。事実、本プログラム参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合は、年々増加傾向にある。令和元年度では、その割合が 52.4%と目標値の 50.0%を上回っていることは、本プログラムの顕著な成果と言える。また、放送記者やジャーナリストといった、本プログラム参加学生のその後の進路に如実に示されるように、本学が求める「課題発見・解決型グローバル人材」のロールモデルと言ってもよい人材が育成されており、その点でも本プログラムの教育効果は高い。

【目標の達成状況及び補助期間終了後の展開】

1・2 年生を対象とする本プログラムの参加学生の割合については、令和元年度も目標値を下回る結果となったが、年々増加している。文系・理系双方にまたがる全学部から参加があり、全参加学生のうち、理系学生の占める割合は、40%を超えている。本プログラム開始当初は、100 名前後の参加者であったが、令和元年度には、138 名に伸びた。参加者の増加は、新入生向けのオリエンテーションや授業での案内、プログラム参加学生による全体報告会の年 2 回開催、さらにオープンキャンパスでの高校生やその保護者向けのパンフレット・チラシの配布等の結果であると言える。

長期学外学修プログラムを経た学生の成績評価について言えば、本学では、本事業申請後に全学的な成績評価方針を定め、「秀」については履修者の概ね 10%を上限とすることを目安にした。さらに、令和元年

（テーマ：Ⅳ、大学等名：神戸大学）

度から、「秀」及び「優」を合わせて、履修者の概ね 40%を上限とすることを目安とし、厳格な成績評価を実施している。そのため、目標値を設定した時点よりも、厳格に成績評価を行っている状況にある。本項目は、本プログラム参加学生と不参加学生の G P A の平均値の差を指標としている。目標値は達成できていないが、本プログラム参加学生の方が成績評価の推移は良好であり、本プログラム参加後のアンケート結果を見ても、ほぼ全員が、「学外学修で関心を持ったテーマについて、より深い学修をしたい」と回答しており、本プログラムへの参加により、学修意欲の向上が得られていると言える。

退学率、学生の授業外学修時間、進路決定の割合、学生が企画する活動数のいずれの項目も、令和元年度は、目標値に達する結果となった。特に、授業外学修時間、学生が企画する活動数の増加傾向は、「学びの動機づけ」をキーワードに、学修活動における学生の主体性を大学入学後の早い段階から身に付けさせるという本プログラムの目標が達成されていることを示していると解してよいであろう。

補助期間中は、本学の教学マネジメントを行う大学教育推進機構の下に、本プログラムを実施する部局から選出された教員を主構成員とする「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会」（以下、神戸 GCP 委員会）を設置し、全学的な体制を構築・運営してきた。神戸 GCP 委員会は、コースの認定、予算配分を始めとして、本事業の企画・立案、運営及び実施について、全学的な意思決定を行うほか、各コース終了後には、実施結果について自己点検及び評価、さらにプログラム全体の改善を行ってきた。

本事業への参加学生の 99%以上が「満足」または「概ね満足」と回答しており、満足度が非常に高いプログラムであること、全学プログラムとして年々参加者が増加傾向であることが評価され、補助期間終了後も、神戸 GCP 委員会を中心に、神戸グローバルチャレンジプログラムを継続実施することにした。令和元年度に全学部との意見交換を行い、各コースの企画実施・広報活動・危機管理などの運営面で、各学部と連携して実施していくことが確認された。また、学部からの要望事項として、本事業は 1・2 年生に向けた取組であるが、専門性を身に付けた上で参加することは、低年次とは異なった学修活動成果が期待されるため、対象学生を 3・4 年生にも広げてよいのではないかと意見があった。その点を踏まえ、令和 2 年度の本プログラムの実施には、3・4 年生まで対象を拡大し実施することにした。

本プログラムを継続実施するにあたり、専門知識と豊富な海外経験に基づく見識のあるコーディネーターの存在が不可欠であり、令和 2 年度についても継続して雇用することとし、人件費については、大学の本部経費から予算措置されることになった。派遣受入先である海外の機関との調整や帯同に伴う教員の旅費等、補助期間終了後の令和 2 年度の本プログラムの運営費についても、学内で予算措置される予定である。

本プログラムの参加費用は、学生が自ら負担することが原則であるが、多くの学生が参加できるよう、補助期間中は、独立行政法人日本学生支援機構（通称 JASSO）奨学金による学生への支援に加え、寄附を原資とする神戸大学基金から助成金が支給されてきた。補助期間終了後も学生への支援として、引き続き神戸大学基金からの助成を行い、後援会、同窓会組織からの援助も受ける予定である。

さらに、今後も新型コロナウイルス感染症の影響で、海外渡航が難しい状況が続くと考えられるため、海外の企業や大学とオンラインで交流しつつ、国内で学修活動を行うといったコースも検討している。コロナ禍であっても、学生の海外での学修活動意欲を維持できるよう、各コースのさらなる充実を図り、本プログラムの発展へと繋げていく。

【必須指標の達成度】

	平成 27 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
長期学外学修プログラムに参加する学生の割合（全学生）	—	2.53%	1.19%
長期学外学修プログラムに参加する学生の割合（1, 2 年生）	—	5.67%	2.63%
長期学外学修プログラムを経た学生の成績評価	—	0.41	0.25
退学率	1.12%	0.98%	0.95%
学生の授業外学修時間（全学生）	—	6.5 時間	9.7 時間
学生の授業外学修時間（プログラム参加学生）	—	12.0 時間	12.8 時間
進路決定の割合	92.11%	94.09%	94.36%
学生が企画する活動数	37 件	150 件	152 件